中央区はじめて!!物語

中央区は、江戸独自の文化が生まれたところであり、真っ先に西洋文化が流行したところだ。そんな中央区には、世界初や日本初など、いろいろな「はじめて」がある。

わーっ、いろいろあるのね。

日本初の電話ボックスは白かった
町中の公衆電話ボックス

(日本初の公衆電話ボックス)→p.175

町角に日本初の公衆電話ボックスができたのは、1900（明治33）年。京橋のそばにつくられた公衆電話ボックスは、真っ白な木製で、「自働電話」とよばれた。電話料金は5分で15銭。入れたお金が下の金庫に落ちるとき、5銭は「チーン」となり、10銭は「ボーン」となった。この音で、電話を相手につなぐ交換手が料金を確認したので、この方式を「チーン・ボーン式」とよんだ。電話が広く使われるようになると、「もしもし」は流行語になった。

英語で話そうとして、「もしもし」というときに、「イフイフ（If, If）」って言う人もいたんだって。

日本人に合うくつをつくろう!
日本製のくつ製造工場

(くつ業発祥の地)→p.191

西洋文化が入ってくると、着物に「くつ」をはくことが、新しいおしゃれなファッションとなった。しかし、当時のくつはすべて外国製で、大きすぎた。そこで「日本人の足に合うくつをつくれば売れる！」と思い立ったのが、西村勝三という人物。1870（明治3）年、勝三は入船五丁目（現・入船三丁目）に小さなくつ製造工場を建てて、明治政府にたのまれた、軍人のくつをつくった。それが日本ではじめての日本製のくつだった。

3人で力を合わせてつくった
日本の発明品だよ、人力車

(人力車発祥の地)→p.147

文明開化の時代に、馬車に乗る西洋人を見て、日本橋箔屋町に住む和泉要助は、「馬ではなくて人が引けば、もっと自由に動ける」と思いついた。要助は、鈴木徳次郎と高山幸助の2人と協力して、日本初の人力車をつくりあげた。1870（明治3）年、3人は東京府に人力車の製造と営業の許可をもらい、日本橋の南で商売をはじめた。今でいえば、車もつくるタクシー会社みたいなものかもしれない。

女の子だけで海水浴
東京初！ 女性専用の海の家

(旧月島海水浴場)→p.213

現在の勝どき五・六丁目の先がまだ海だったころ、そこには月島の海水浴場があった。今の海の家のような小屋が数多くあり、そのなかの数軒が、東京ではじめての「女子部」だった。女子部には、風呂やきちんとした更衣室、食堂があった。しかし、月島の海水浴場は、水質が悪化して閉鎖された。月島に海水浴場があったのは、1917（大正6）～1919（大正8）年の、たった3年間だった。

楽しそう！泳いでみたかったな。

名前の由来はダジャレから!?
江戸生まれの「べったら漬け」

(寶田恵比壽神社)→p.147

大根を米こうじと砂糖でつけた「べったら漬け」は、江戸時代初期に江戸でつくり出された。大伝馬町の寶田恵比壽神社のお祭りで、商売はんじょうを願って市を立てたのが有名な「べったら市」で、お供えものとして売られたのがべったら漬けだった。「べったら、べったら」と言いながら、「買わないと、着物にこのべたべたをつけちゃうぞ」と、ふざけて売っていたのが名前のはじまりといわれる。「べたべたしているから」という説もある。

えーっ、ダ、ダジャレなの？

世界初の発見はここから発信!
指もん研究の父、ヘンリー・フォールズ

(指もん研究発祥の地)→p.203

指もんが1人ひとりちがうこと、それを犯罪捜査につかえるのでは、と考えたのが、築地外国人居留地(→p.72)に住んでいたヘンリー・フォールズだ。彼は日本人が書類に親指で印をおすのを見て、指もんの研究をはじめたという。ヘンリーの研究論文は、イギリスの科学雑誌「ネイチャー」に発表され、のちの世界の犯罪捜査に役立った。

ガス灯の次は電気だよ!
日本で最初の電気街灯柱

(日本初の電気灯柱の跡)→p.175

文明開化で外国から入ってきたものは、まず中央区で実験されたものが多い。電灯もその1つ。1882（明治15）年、日本で最初に、街頭で電灯の明かりがつけられたのは、銀座だった。この電灯を見ようと、夜の銀座は毎日大にぎわいで、そのようすをえがいた絵は、飛ぶように売れたという。

＊それぞれのできごとがはじまった場所は、矢印で示したページの地図に記している。